キズナエピソード

槍水りり　1話

//ヴィジュアルノベル形式開始

悪魔どもとの激しい戦いに勝利した俺たち。

一息つこうとした時、りりが俺を抱き上げた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

［りり］

「オムっち、おつ～。

今回もアタシ達の勝利だね！　イェイ！」

［オムニス］

「――って、おい！　上！」

［りり］

「え？　……うわわっ、なんか落ちてきた!?

瓦礫……？

あっぶなぁー！」

［オムニス］

「ふぅ、まったく……気を抜くなよ」

［りり］

「あはは。オムっち、ありがとう！

アタシを助けてくれたんでしょ？

いいとこあるじゃん！」

［オムニス］

「……！」

［りり］

「あれ？　どうかした？」

［オムニス］

「……いや、なんでもない。

ほら、さっさと行くぞ」

//ADV形式終了

//暗転

//ヴィジュアルノベル形式開始

//白い部屋

白い部屋に戻って来た俺は、深くため息を吐いた。

「助けてくれたんでしょ？　いいとこあるじゃん！」

この言葉に強い既視感を覚える。

まるで学生時代の青春の匂いが思い起こされるような、

そんな感覚……。

そんな時――

//ページ切り替え

突如として、俺は耐えがたい睡魔に襲われる。

視界がぼんやりとしたモヤに包まれる中で、

俺は知りもしない記憶を垣間見た。

それは、渋谷のカラオケボックス……。

俺は、友達と大人数で遊んでいた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

//カラオケボックス

［友人］

「いえーい！　次、八代目誰か一緒に歌うっしょ？

歌っちゃうっしょ？

フーゥワ！　フーゥワ！」

［女生徒］

「はいはーい、私歌いまーす！」

［とびお］

カラオケに着くまでクラスのメンツだけかと思っていたが

知らない顔がいくつもあった。

どうやら、誰かが他校のグループも呼んだらしい。

［りり］

「うぇーい！　お前、超歌上手くない？

よかったよ！」

［とびお］

その中で、ひときわ目立つ存在がいた。

それが、槍水りりだった。

［りり］

「あ、グラス空いてる人いるー？

飲み物持ってくるよ～？」

［とびお］

りりは楽しそうに周りを盛り上げ、

それでいて、周囲への気配りを忘れていない。

中心でありながら縁の下の力持ち。そんな印象だった。

［とびお］

「あ、じゃあ俺が飲み物持ってくるよ」

［とびお］

りりが皆の注文を聞いたところで、

俺は名乗りを上げてフリードリンクのフロアに移動した。

歌い疲れたので、少し休みたかったのだ。

//カラオケボックス廊下

［とびお］

脇に椅子を見つけて、俺は腰を下ろす。

ふぅ、とため息を一つ。

と、しばらくして、りりがこちらにやって来た。

［りり］

「おっ、とびおじゃん！

どうしたの、何かあった？

あ！　もしかして、グラス一人で持ちきれない？」

［とびお］

「いや、ちょっと休んでいただけだよ。

槍水さんこそどうしたの？」

［りり］

「はは、槍水さんて！　りりでいいよ。

グラスを倒しちゃったヤツがいてさ。

アタシはおしぼり取りに来たの」

［りり］

「あっ、飲み物持ってくのも手伝うよ。

……はい。とびおはそれ持って先に行ってて」

［とびお］

りりは笑いながら、

グラスの乗ったトレイを渡してきた。

俺も休憩は終わりにして、部屋へ戻ることにする。

［男1］

「わお。君たち、かわういいねぇ～」

［女生徒］

「え、あの……」

［男2］

「ねぇねぇ、いいじゃんよぉ。

俺達と一緒に歌っちゃおうぜぃ？」

［女生徒］

「うぅ……」

［とびお］

途中で、面倒くさい場面に遭遇してしまった。

絡まれている女子は、名前は知らないが、顔は知っている。

さっきまで同じ部屋で歌っていた子だ。

［とびお］

流石に見て見ぬふりは出来ないか。

俺は、彼らの間に割って入ることにした。

［とびお］

「すみません。

彼女、俺らと一緒に歌ってるんです」

［とびお］

なるべく波風を立てないようにしたつもりだが、

その態度が逆に弱そうに見えたのだろうか。

男達は、高圧的に俺を睨みつけてきた。

［男1］

「はぁ？　だから、なに？」

［男2」

「じゃあ、お前も一緒に歌う？

それならいいっしょ？」

［とびお］

「いや、そういうわけには……」

［とびお］

その時、りりが割って入ってきた。

［りり］

「あー。ハマっちじゃん！　ひさしぶり～」

［ハマっち］

「ん？　おぉ、りり！」

［りり］

「りょーちんもいるじゃん！　ちょっとちょっと～。

嫌がってる女の子に何してんの。

彼女に言いつけちゃうぞー？」

［りょーちん］

「え、あっはっは……それはちょっと勘弁。

こいつら、りりのダチ？

あー、はは、邪魔してごめんね？」

［りり］

「うん、ばいばいー

今度一緒に遊ぼーねー？」

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

あれよあれよという間に、りりは男たちを追い払ってしまった。

その手際の良さに、俺はりりの顔を見つめたまま

感嘆の息を漏らす。

「ん？　どしたよ？　ほら、アタシ達も戻ろ？」

「あ、あぁ」

//次ページ

「とびお、結構やるね」

途中で、りりが話しかけてきた。

なにが？　と尋ね返すと、屈託のない笑顔が返される。

「さっき、助けてくれたんでしょ？

いいとこあるじゃん！」

気付けば、俺の心は大きく揺さぶられていた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//1話END